



雑誌「愛犬の友」

南極越冬隊が昭和基地に残したタロ、ジロが元気に生き残っていたときの感動は今でも胸に鮮やかだが、それにまるわるエピソードを犬の係だった北村泰一教授が語っていて、そのなかで、この2匹以外の犬へのギルティの思いが読んでいて胸に響いた。

「愛犬の友」（誠文堂新光社）は広告ばかりの雑誌だが、時に眼からウロコの思いをさせられることもあって、七月号では「罰か褒美かをめぐるとつけの問題点」というシンポジウムがなかなか示唆に富んでいる。犬が飼い主を嫌う気持ち、「おまえにそこまでされる筋合いはない」という感情を理解するべきだというのだ。私も親として教師として自戒しなくてはいけないと思った。

たしかに家庭でも学校でも、誉めると叱るの使い分けは難しい。芸能界あたりでは「芸人殺すに刃物はいらぬ。お上手お上手お上手と三遍ほめる」と言うとか。「人をバカにした話ねッ」と今は亡き淡谷のり子がテレビで憤慨していたのを思い出す。

「うちの子しつけちゃった」という連載では、犬の問題行動に悪戦苦闘する体験談がおかしいやら気の毒やら。いずれの場合も基本は愛情、そして熱意と忍耐。それがあれば、何の仔でもちゃんと育つのではないかしら（と言うのは簡単だが、それが一番難しい）。

この雑誌、私の行きつけの某所に置いてあるのだけれど、頁を開くのが怖いことがある。それというのも満載されているポトトレイト（もちろん犬）がどれもあまりに愛らしく贅沢な表情で、ほとんど貴族的なものだから、人間であるわが身がみすばらしく思えてしまうからだ。

初出：毎日新聞「マガジンラック」二〇〇〇年二月

ホームページ掲載：二〇二一年八月



雑誌「愛犬の友」